様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成２３年６月１０日現在

機関番号：１２４０１
研究種目：基盤研究（C）
研究期間：2008～2010
課題番号：20520007
研究課題名（和文）現代西洋思想と価値ニヒリズムの問題

研究課題名（英文）Modern Thoughts of Europe and the Problem of Value-Nihilism

研究代表者
渋谷　治美（SHIBUYA HARUYOSHI）
埼玉大学・教育学部・教授
研究者番号：50126083

研究成果の概要（和文）：近代から現代にかけての哲学・思想の質は、二度の世界大戦と大量殺害兵器の登場、自然科学の飛躍的高度化、キリスト教の思想的支配力の壊滅的後退、等々から、確実に価値ニヒリズムの方向を歩んでいる。本研究は当初、そのさいモダン思想（ニーチェら）の価値ニヒリズムをポストモダン思想（ドゥルーズら）へと架橋する役割を担ったのがフランクフルト学派、とりわけマルクーゼだったのではないか、という仮説を立てたが、この検証は未だ成功していない。

研究成果の概要（英文）：We find the main characteristic of modern thoughts and philosophies follows the direction of Value-Nihilism because of two world wars, of appearance of mass killing weapons, of high development of natural sciences and of hopeless decline of Christianity. At first our project had a hypothesis that Furankfurter Schule, especially Marcuse has had the role of mediation of Value-Nihilism from Modern Thoughts (ex. of Nietzsche) to Post-Modern Thoughts (ex. of Deleuze) , which has been regrettably not yet verified.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2008 年度	500,000	150,000	650,000
2009 年度	500,000	150,000	650,000
2010 年度	700,000	210,000	910,000
総　計	1,700,000	510,000	2,210,000

研究分野：倫理学
科研費の分科・細目：哲学　・　哲学・倫理学
キーワード：哲学　思想史　ニヒリズム　価値　疎外

１．研究開始当初の背景

本研究代表者・渋谷は 20 数年前から、現代思想は価値ニヒリズムと正対するべき状況にあると自覚し、さまざまな角度からこれを探求してきた。この宇宙における人間の位置と未来、地球の生物進化史における人間の位置と特徴、から始まって、近代ドイツ思想における価値ニヒリズムの問題、とりわけカント思想と価値ニヒリズムとの距離の近さ、さらにはフロイト、サルトル、カミュ、らのニヒリズム思想を研究してきた。渋谷はこうした問題意識に基づいて、価値ニヒリズムに関連した課題により科研費の基盤研究（C）をこれ以前に二回受託しており、それなりの成果を蓄積してきた。こうした問題意識の延長で、自ずと本研究が構想された。

２．研究の目的

（１）［概要］ニーチェらのモダン思想における価値ニヒリズムの系譜を、20 世紀戦後の西洋思想の主潮流であるポストモダン思想に接続したのが、フランクフルト学派、とり

わけマルクーゼではなかったか、という仮説のもとに、マルクーゼの再読、主要なポストモダン思想の未読文献の精査、関連先行研究の一瞥を通して、上記の仮説の検証を図った。

（２）［全体構想］本研究の目的は、二十世紀西洋思想の主潮流（フランクフルト学派、ポスト・モダンと呼ばれる潮流、等）を価値ニヒリズムの視点から捉え直し、二一世紀の現代思想が価値ニヒリズムを正視するべき時期にあることを明らかにすることに置かれた。

T.アドルノは、寺院類はホメーロスの時代以来「啓蒙」の道を歩み続け、ついに二十世紀にいたってそれがヒトラーとなって帰結した、と論じた（『啓蒙の弁証法』）。だが、いうところの「啓蒙」とは無から発し、無と背中合わせに展開し、無へと至るのではないか。ハイデガーの「死に至る存在 Sein zum Tode」をそのように改釈することもできるのではないか。とすれば、われわれは一歩進めて、人類の思索と歴史を舞台として「ニヒリズムの弁証法」というドラマを読みとることもできるのではないか。人類の営みを一言で表せば「企て」であろうが、これはまた「技」であり「人為」「技巧」であり、未来意識であり、目的定立実現活動でもある。人間はこれに携わっている限り（ということは、もの心ついて死ぬまでの大半の時間において）当面の間自分が生きる「意味」を確信する。その果てに人類こぞって、「人生には意味がある」という＜まどろみ・自己欺瞞＞に陥るのだ。だが、個であれ集団であれ類であれ、長短の未来に目標を企てそれの実現に向かって全英知と能力を傾けるとして（全文明・全歴史）、そのこと自体には何ほどの「意味」があるであろうか。――この根本的な価値ニヒリズムに蓋をする営みが宗教であり、形而上学であり、技術文明であったと喝破したのが、カント、ニーチェ、ハイデガー、アドルノたちであった。とすれば、二一世紀の思想的課題は、この根底的な価値ニヒリズムと人類がはじめて真正面から「対話」することにある、といえるだろう。

３．研究の方法

（１）文献購読を継続し、仮説と照らして見えてきたものをおりおり講義に挟んだり、それに関して研究協力者と意見交換したり、関連発表論文に活かしたりした。具体的には、アドルノ、マルクーゼらのフランクフルト学派を真ん中にして、これを挟んでフロイトの精神分析・夢理論・文明批評・宗教論・芸術論など多岐にわたる業績、第二次世界大戦後のフランスに展開したカミュ、サルトルらの実存思想、レヴィ＝ストロース、フーコー、ドゥルーズ、デリダらのポスト・モダン思想を、つまり二十世紀に展開した現代西洋思想を、近代価値ニヒリズムの系譜の延長上に置くことによって、価値ニヒリズムの観点から把握し直すこと、これが本研究の主要方法であった。当初の予定では、これらに加えて、ベンヤミン、ユンク、メルロ＝ポンティ、ルカーチ、バタイユ、ラカンらも研究対象に加えることとなっていた（が、結果としてはメルロ＝ポンティを除いて触れることができなかった）。

（２）研究期間の三年のあいだに、ウィーン大学のペルトナー教授、福岡女子大学の望月教授を２回ずつ訪問し、本研究の中間報告をしつつ批評を受けた。いずれも啓発的な指摘を頂くことができた。例えばペルトナー教授からは、ニーチェにつながるドイツにおける価値ニヒリズムの系譜のうえでシェリングの役割は無視できないはずだ、という指摘を受けた（H.20）。そこで渋谷はシェリングの『人間的自由の本質』を再読し、キリスト教から発する形而上学、実存主義思想、価値ニヒリズムの三者の距離がこれまで考えていた以上に近いことを発見した。また望月教授からは、フランスのポスト・モダン思想、例えばドゥルーズが価値ニヒリズムの方向に向いていたかどうかは検証が難しいのではないか、という指摘を受けた。これにより、たとい大括りにはそのようにいえるとしても、個々の思想家についてテキストからの証拠立てを精緻にする必要を自覚した。

４．研究成果

（１）価値ニヒリズムの継承という観点からモダン思想とポストモダン思想とを媒介する役割を果たしたのがマルクーゼであろう、という主要仮説は、この３年間の研究では残念ながら確証されなかった。ただし否定されたわけではないので、今後の継続研究課題とする。

（２）これとは別に、ボードリヤール、デリダ等々のポストモダン思想がその主要性格として価値ニヒリズムの方向を取っていることがさらに確信された。ただしメルロ＝ポンティは必ずしも価値ニヒリズムに与していないことが判明した（『見えるものと見えないもの』）。

（３）関連して、見田宗介を四読し（『時間の比較社会学』）、ルソー（『人間不平等起源論』『社会契約論』）、ベルクソン（『道徳と宗教の二源泉』）も再読した。これによって、ポストモダン思想の背景についての思索に膨らみを持たせることができた。

なかでも見田が、現代西洋思想にいたるまでの＜時間への疎外＞とその＜時間からの疎外＞という二重の疎外論を展開していることの意義の深さを改めて認識したことは大きい。この視点と近代西洋価値ニヒリズムの系譜との関連を探ることにも意味がある

だろう。
　ルソーの再読からは大きな収穫を得た。それは、彼の二つの大矛盾を明確に認識することができたことと、「一般意志」論の問題性をはっきりと確認することができたことの二点である。①まず、人間の自然状態（原始状態）と社会・文明についての評価を巡って『不平等起源論』と『社会契約論』とでほぼ 180 度の逆転が起こっていることを確認した。即ち、自然状態を是認し社会状態を否定する観点（『不平等起源論』）から、前者を悲惨に描きそこから社会契約を通して脱却する流れを肯定する観点（『社会契約論』）への逆転。つぎに、社会秩序（ノモス）の優先か個人の自由（洗練されたピュシス）の優先かを巡って『社会契約論』と『エミール』とでやはりほぼ 180 度の逆転が起こっていることを確認した。これを教育論に置き換えてみると、学校教育・市民教育の是認と学校教育の否定・家庭教師による個別指導の推奨、の対立となる。これら二つの矛盾の両翼を包み込んだ人間観、社会観、教育観が今後の価値ニヒリズムの時代には求められるであろう。②カント、マルクスに継承されたルソーの共和思想の中核を「一般意志」論が担っているが、今回の再読を通してここが彼の理論的思想的な最大の弱点であると確信した。途中をはしょって述べれば、この思想が直後のロベスピエール、ナポレオン、下ってヒトラー、スターリンとなって体現したということができると思うからである。それでは今後の価値ニヒリズムの時代にあって、「一般意志」論ではない世界共和主義思想を探るとしたらどの方向に向くべきか、新たな課題が提起された心地である。
　ベルクソンについては、「開いた宗教」「開いた社会」の理念が、生物、歴史、政治経済等の合理的な考察に基づいており、現代でも活かされる可能性があることを発見することができた。また、例えばソクラテスやイエスなど、人類史における開かれた思想・宗教を提起する個人の営みの偉大な意味と、それがまた閉じた社会・宗教のなかに埋没していく宿命にあるという諦観に近い論述などに、彼の議論に深みを発見することができたことは有意義であった。
（４）この三年間にフーコーの主要文献のうち未読のものを集中的に読破した（『監獄の誕生』『狂気の歴史』『知の考古学』『カントの人間学』）。
　まず『監獄の誕生』では、それまでなかった監獄が近代に入って整備され、バンタムのいうパノプティコン（監視者の見えない中央監視塔）が考案されたが、思うほどに効果を発揮しなかったので、現代では施設としての監獄も建造物としてのパノプティオンも役割の点で後退したが、実はそれに代わっていっそう目に見えない形での相互監視システムといわばヴァーチャルなパノプティコンが権力によって張り巡らされてきた、という論旨が読みとれた。これは渋谷が年来問題としてきた、ノモスの重層化・不可視的拡大によるピュシスのいっそう巧みな抑圧・疎外、という仮説と重なる主張なので、貴重な成果であった。
　その後『狂気の歴史』『知の考古学』と続けて読破したが、その結果意外にも、これまで（『言葉と物』『性の歴史』などを通して）研究代表者がフーコーに抱いていた現代哲学思想の最高峰の一人という評価に揺らぎが生じた。それぞれの書物においてたしかに研究課題に関して執拗にその歴史的経緯の追跡とそれに依拠した、常識的解釈の打破とを展開しているのだが、その結果ヒューマニズム的偽善に代わってどのような哲学的パラダイムが浮かび上がってくるのかが結局のところ不明であった。また晩期フーコーは却って価値ニヒリズムから後退したという印象も残った。逆説的にいうならば、この発見は決してひとえに研究代表者の読み方が浅い所為ではない、と開き直ることができたことは、この三年間の大きな成果であった。
　『カントの人間学』は最近邦訳されたのだが、フーコーが 35 歳のときに提出した博士論文（のちの『狂気の歴史』）に添えた副論文の一部だったという。渋谷は岩波書店刊のカント全集に収録されているカントの『実用的見地における人間学』を全訳したので、ことさらにこの若きフーコーの業績に注目した。当然のごとくフーコーは構造に焦点を当ててこのカントの大著を再構成する戦略を提示しているが、「人間学的まどろみ」に自覚的に浸りつつカントの学問構想に沿って総合人間学を構想している渋谷としては、このフーコーの把握に対して批判的な立場に立つこととなった。その内容はこのあと書評となって公表される予定である（下記参照）。
（５）今後の展望としては、研究代表者の研究生命は残り少ない反面、管理職を辞することにより研究条件は好転するであろうと恃んで、①アドルノを中心にフランクフルト学派の役割を見直す、②ニーチェ、ハイデガーらのモダン思想の個々の固有な思想的質をさらに明確にする、③同様にドゥルーズ、デリダらのポスト・モダン思想の個々の固有な思想的質をさらに明確にする、といった多相の努力を継続したい。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計５件）
①渋谷治美「人間と構造　〔書評〕ミシェル・

フーコー著、王寺賢太訳『カントの人間学』（新潮社、2010）」日本カント協会編『日本カント研究 12』理想社、pp.223-226、2011（印刷中）、依頼原稿
②渋谷治美「「見える大学」と「見えざる大学」――または学問論を装ったカントの党派性について――」埼玉大学紀要教育学部、第60巻第１号、pp.93-105、2011、無
③渋谷治美「直近のカント論文への補遺」埼玉大学教育学部社会科教育専修人文・社会科学分野平成 20、21 年度卒業論文集合併号、pp.8-20、2010、無
④渋谷治美「『純粋理性批判』「演繹論」の根本問題・再考――三つの難問の同型性をめぐって――」埼玉大学紀要教育学部、第 59 巻第１号別冊１、pp.99-116、2010、無
⑤渋谷治美「カント「観念論論駁」再考――「定理」の主語の二重性を中心に――」埼玉大学紀要教育学部、第 58 巻第２号、pp.217-232、2009、無

〔学会発表〕（計１件）
①渋谷治美「「観念論論駁」再論」日本カント協会、2008.11.15、九州大学

〔図書〕（計１件）
①渋谷治美、花伝社『リア王と疎外　シェイクスピアの人間哲学』、2009、285pp.

〔産業財産権〕
○出願状況（計　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計◇件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織
(1)研究代表者

渋谷　治美（SHIBUYA HARUYOSHI）
埼玉大学・教育学部・教授
研究者番号：50126083